「心が育つ～2つの見方」

●いただきまーす

　新年度を迎え、子どもから大人まで、さまざまな期待や希望、そして、少しの不安や戸惑いをもって、新しい生活を始めた方もいらっしゃると思います。
　幼い子どもの身体の成長はめざましいものがありますが、どんなに年齢を重ねても、私たちの心は、成長すると聞きました。そうです。身体も成長するように、心も成長すると教えてくれるのが、ほとけさまの教え、浄土真宗です。10年以上前に、次のようなお話しを聞きました。
　ある大学の先生が、夜、ファミリーレストランに行くと、近くの席で幼い女の子が母親と食事を待っていました。注文した料理がくると、その子は小さな掌（てのひら）を合わせ、「いただきまーす」と言いました。
　お坊さんでもある先生は、「このお母さんは若いけれど、よく子どもを躾けているなあ」と感心したそうですが、

　「○○ちゃん、ここではお金払っているから、いただきますと言わなくていいの。でもね、おうちでは、おかあちゃんが作ってあげているんだから、いただきますと言うのよ」

　とそのお母さんは教えたそうです。先生は、最近の若い世代はこう考えているのかな、親が恩を押しつけているようだなと感じたそうです。

●価値と意味

　私たちには、「価値を知る」という見方と、「意味に気づく」という見方のふた通りがあると学んできました。別の表現をすれば、世間の見方と、宗教（仏教）の見方です。
　先ず、価値を知るという見方は、役に立つか立たないかと、他のものと比べることで、自分にとって都合がいいかどうかという判断をもとにしています。
　これは、人間が「よりよく生きる」ために必要なことです。この見方によって、農耕生産も、狩猟効率も、経済活動も、医療福祉も、そして、科学技術も、およそ、人間の生活に関わる営みが発展してきたといえるでしょう。
　このように人間にとって、自分の「都合のよい」ことがかなうことを仏教では、「如意」、意の如くなる、思い通りになると表現しました。
　しかし、人間にとっての幸せとはそれだけでしょうか。思い通りにならなければ、不幸なのかと仏教は問いかけてくれます。

●不如意に教えられる

　お釈迦様は、思い通りにならない「不如意」なことを「生・老・病・死」と教えてくれました。四苦八苦の四苦のことで、生まれること、老いること、病むこと、死ぬことは、すべて思い通りにならないことです。もちろん、老人や病人を不幸だというのではありません。思い通りにならないことを通して大切なことに気づけよ、と教えているのです。
　先の「意味に気づく」とは、老いや病など自分の身に起きたことを、私にとって他のものと比べることもできず、かけがえがないことだと気づくことだともいえます。
　たとえ私に「不如意」、都合が悪くても、このことがあればこそ、今の自分があったのだと「意味に気づく」と、私が「本当に生きる」ことにならないかと教えます。
　すると今までの生き方が私を作ってきたのだ、また、今の私は多くの恩により恵まれた私だと、気づかずにいたことを、申し訳ない、おかげさまだった、と心が育ち、自分の都合を超えて、自分のあるがままを受けとめる生き方さえ恵まれます。
　都合を満たすことを幸せと感じる私に、都合を超えた出来事にも、よろこびや安堵や感謝を気づく生き方があると仏教は教えてきました。
　さて、茶碗1杯のご飯は価値にすれば100円前後でしょうが、そのご飯に、かけがえのないお米のいのち、それによって生かされている私だ、という意味を発見したからこそ、頂くという礼法が生まれました。すると、いただきますという食前の言葉は、やがて、その言葉を口にする人自身の心を育て、価値だけでなく、尊い意味を見出す人生に導いてくれるのだと私は教えられています。

●「いただきます」

　桜井俊彦先生の『やわらか子ども法話』（法藏館、2017年）から、「いただきます」という題の話をご紹介します。

　スナックに行って、カウンターに座りました。つまみにエビシウマイを頼みました。前に立った20歳くらいの店の子に「食べていいよ」といいました。彼女は手を合わせて、「いただきまーす」といって食べはじめました。
　「感心だね、いつも手を合わせて食べるの?」と尋ねると、「おばあちゃんがいつもこうして食べてたから自然と」と答えました。
　石川県の保育園を営んでいたお寺の先生と園児の会話です。
「食事をいただく前に、手を合わせて『いただきます』といってから食べましょう」
「どうして?」
「食事の材料を運ぶ人や給食をつくる人がいるおかげで、こうして食事がいただけるんだよ」
「お母さんは、給食費、はらったっていってたよ」
「給食費は、運んだ人やつくった人にはらうお金だよ。お魚さんに、一円でもはらいましたか?　お米も野菜も、みんな生きているいのちを、私のために差しだしてくれているのです。だから、お礼をいってから食べましょう」
　またあるとき、園児のお母さんから、
「うちの子は、食事の前にムニャムニャいって、なかなかたべはじめないのです」
　と相談されました。次の日、その子のそばで何をいっているのか、耳をすませてみました。
「お魚さんごめんなさい、ニンジンさんごめんなさい」
　と食材のひとつひとつにいっていたのです。そのとき、先生は、「○○ちゃん、手を合わせて『ナムアミダブツ』といって食べましょう。『ナムアミダブツ』のなかに、『ごめんなさい』も『ありがとう』も全部入っているんだよ」
　と話されたといういうことです。
　食事のとき手を合わせる意味は、食べ物が私に届くまでに何人もの手をへてきていることへの感謝と、他の生き物のいのちをいただいて私のいのちが成り立っていることへの感謝のすがたです。
　説明する人がいなくなったことと、お年寄りと一緒に住まなくなった家族の形が、心の教育にも大きく影響を与えているように思いました。（抄出）

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた!　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様·御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様·御手紙』を学びにいらっしゃいませんか?　お待ちしてます（会費はいずれも資料·茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。